

仁義なき戦い

——映画文学人生論

原作：飯干晃一 (1972年)「週刊サンケイ」
監督：深作欣二 (1973年) 脚本：笠原和夫
出演：広能昌三 菅原文太 撮影：吉田貞治
山守義雄 金子信雄 音楽：中島利幸
坂井鉄也 松方弘樹
榎原誠吉 田中邦衛
若杉寛 梅宮辰夫

戦争という大きな暴力は、消え去ったが

極道のヤクザ映画といえば、任侠と義理人情の世界に生きるかっこいい男たちを描いたピカレスクロマンということになっていたが、その通念をひっくりかえしたのが深作欣二監督の実録路線ヤクザ映画『仁義なき戦い』。

ヤクザには義理も人情もない、利害損得だけで動くという冷めた人間観に基づいている。

「敗戦後すでに一年。戦争という大きな暴力こそ消え去ったが、秩序を失った国土には新しい暴力が渦巻き、人々がその無法に立ち向かうには、自らの力に頼るしか無かった」。

というナレーションではじまるファーストシーンは昭和二十一年、仁義なき抗争の種がまかれた終戦直後だ。場所は原爆で壊滅した広島と艦載機の爆撃で全市灰燼となった軍港呉。かつての勇壮な軍艦マーチに代わって仁義なき戦いのテーマ曲が捨てばちの気分のリズムで流れてくる。

復員兵の広能昌三（菅原文太）は焦土と化した呉にいた。呉には残された軍需物質をめぐって収奪者が乱入し、無法者の街になっていた。広能はヤクザではなかったが、友人にケガを負わせた男を射殺したため、刑務所行きとなる。

刑務所は囚人であふれていて、保釈金をつめば仮出所がみとめられる。広能には金はないが、同じ刑務所にいた若杉寛（梅宮辰夫）が出所してから、保釈金を都合する有力者を見つけてくれた。



仁義なき戦い

映画文学人生論

その有力者が山守組組長山守義雄（金子信雄）——となると、広能が山守の盃を受け、ヤクザの組員として親分のために命を投げ出して、働くようになるのは自然の成行きである。

広能は山守の命令で小指をつめさせられたり、対立する暴力団土居組の組長を襲撃、重傷を負わせたりして、再び刑務所へ舞い戻る。

岐阜刑務所を仮出所すると、山守組は内部分裂していた。特に若頭の坂井鉄也（松方弘樹）が山守組長のいうことをきかなくなっている。「これが仁義に生きる極道の姿か」と山守組長は広能に泣いて訴えた。しかし、坂井によれば、「山守の下にいれば仁義もくそもない」という。どっちもどっちだと広能は思い、山守には親分子分の盃を返上し、坂井には兄弟分の盃を割って、双方から距離をとる。

力をつけた坂井は山守を引退に追い込んだが、老かいな山守は、かつての広能のような単純な若者をおだてて、坂井の殺害に成功した。坂井の葬式にあらわれた広能は拳銃をとりだして、遺影や花輪に数発ぶっぱなした後、「山守さん、弾はまだ残つとるがよう」とすごむ。かっこいいが、これは映画的誇張で、原作にはこんな場面はない。

原作は広能のモデル美能幸三の獄中手記をベースにした飯干晃一の小説。美能幸三は昭和四十五年九月、網走刑務所から出所している。

小指なき手の盃や濁り酒